

Profile

松浦奈々 (ヴァイオリン)



7歳よりヴァイオリンを始め、桐朋女子高等学校音楽科を経て、桐朋学園大学を首席で卒業。第13回宮城若菜音楽コンクール弦楽部門第1位、ヴァイオリンを独、主幹千原、藤田幸一郎の氏に、室内楽を徳永二男、毛利節子の両氏に師事。これまでに「プロジェクト」、JTアールホール室内楽シリーズ、鎌倉ノブスチン、東京アンサンブル、オーケストラMaple、(財)地域創造公共ホール音楽活性化プロジェクトフォーラム、宮崎音楽祭、NHK-FM「リサイタルノヴァ」等に出演。2011年より日本センチュリー交響楽団アシスタント・コンサートマスターを経て、同団コンサートマスターに就任。2019年「ベートーヴェンヴァイオリンソナタ全曲演奏会」を開催。大阪より評価され令和元年度「咲く心の花賞」を受賞。トリノで開催されたオーケストラマスター。

林七奈 (ヴァイオリン)



京都府立堀川高等学校音楽科、東京芸術大学音楽学部音楽科卒業。2005年9月より大塚シラフエール交響楽団(現大阪交響楽団)コンサートマスターに就任。2008年より3年間イタリア・コモネ劇場室内オーケストラコンサートマスターに就任。2009年よりサイトウキネンオーケストラ(セイヴ・オザワ)本フェスティバルに出演。2011年の中国ツアーにも参加。2012年関西交響楽団結成。活動のエリアは広範囲に及んでおり、東京や名古屋等からも招かれているほか、チェコを代表する名門ブラザー・クワットとも共同。NHK-TV「クラシック劇場」NHK-FM「ベスト・オブ・クラシック」でもその演奏が放送されている。2014年度文化庁芸術奨励賞受賞。2015年度「咲く心の花賞」を受賞。2016年3月フランス・パリ「関西交響楽団」プロダクションをリイース。大阪芸術大学講師として後進の指導にもあたっている。

鈴木康浩 (ヴァイオリン)



桐朋学園大学卒業。ヴァイオリンを辰巳明子氏、ヴィオラを岡田神夫氏に師事。第9回クラシックコンクール全国大会ヴァイオリン部門第2位(1位なし)。第12回安部賞音楽コンクール弦楽部門第1位ほか受賞多数。2001年からベルリンのカラヤン・アカデミーで研鑽を積んだ後、ベルリン・フィルの契約団員となる。04年に帰国。サイトウキネンオーケストラ、宮崎国際音楽祭などで活躍しながら、アンサンブル天下統一、TOKI弦楽四重奏団、王子ホテルのランチタイムコンサートなど、室内楽にも力を注いで活動をしている。桐朋学園大学、昭和音楽大学、後志学園音楽大学で講師を務め後進の指導にあたっている。読売日本交響楽団ソロ首席ヴァイオリン奏者。

上森祥平 (チェロ)



日本音楽コンクール優勝。ヴォルフガング・ベッサー氏に師事し、ベルリン芸術大学卒業。パハハ無伴奏チェロ組曲とホルン奏者から11曲組作品まで多様な無伴奏作品を組み合わせた公演は開演10年を経て、パハハヴァリオン無伴奏チェロ組曲全曲公演プログラムを拡大。毎年各方面から絶賛を受けている。東京・春・音楽祭、NHK・BS・FM他出演多数。東京交響楽団、東京シティ・フィルハーモニー管弦楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、新日本交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、大阪交響楽団と共演。第1回桐朋音楽フェスティバル基金賞を受賞。京都府文化芸術奨励賞。現在、桐朋女子大学特別約音座チェロ奏者。

直江智沙子 (ヴァイオリン)



桐朋女子高等学校を経て桐朋学園大学を卒業。在学中より小塚延嗣音楽塾、宮崎国際音楽祭、水戸室内管弦楽団、JT室内管弦シリーズ、東京のオペラハウス、サイトウキネンオーケストラのコンサートマスターの首席奏者、室内オーケストラに参加。また、広響、京響、新日本フィル、山響、私塾などの各オーケストラで首席奏者を務めている。これまでに放送賞正雄、市川隼二、徳永二男の各氏に師事。団員法人ロームミュージックファンデーションの奨学金を得てベルリンに留学。シェファン・ヒカル氏に師事。現在神戸フィルハーモニー管弦楽団協奏ヴァイオリン首席奏者。

杉江洋子 (ヴァイオリン)



京都府立堀川音楽高等学校、東京芸術大学音楽学部音楽科を卒業。在学中より小塚延嗣音楽塾、宮崎国際音楽祭、水戸室内管弦楽団、JT室内管弦シリーズ、東京のオペラハウス、サイトウキネンオーケストラのコンサートマスターの首席奏者、室内オーケストラに参加。また、広響、京響、新日本フィル、山響、私塾などの各オーケストラで首席奏者を務めている。これまでに放送賞正雄、市川隼二、徳永二男の各氏に師事。団員法人ロームミュージックファンデーションの奨学金を得てベルリンに留学。シェファン・ヒカル氏に師事。現在神戸フィルハーモニー管弦楽団協奏ヴァイオリン首席奏者。

金本洋子 (ヴァイオリン)



神戸女子学院大学音楽学部ヴァイオリン専攻卒業後、ヴィオラに転向し、京都府交響楽団に入団。ヴィオラを故西岡正臣氏・深井碩章氏に師事。渡後し、ロイス・ランツベルク氏(ハンブルク交響楽団ソロ首席)のもとで研鑽を積む。オーケストラに所属しながら、積極的に室内楽やソロのコンサートに取り組みしている。アンサンブルは五嶋、カールツットZWEIMAL、ZWEIメンバー、アルデアチェンバーオーケストラ主宰。K'classic(旧京阪政治線でクラシックに親しむ会)会長。京都・新築 観音寺でVOWS concertを定期的に企画し、好評を得ている。

福富祥子 (チェロ)



東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校、同大学を経て同大学院修了。国家演奏家資格を得てベルリン芸術大学修了。ローマ国際音楽コンクール第1位、ヨーロッパ国際音楽コンクールデュオ部門最高位、令和元年度文化庁芸術奨励賞。2019年音楽クリティック・クラブ賞奨励賞等、受賞多数。積極的に演奏活動を行うほか、東京芸術大学大学院修士後進課程では「演奏家としての調律」についての研究で2009年博士号(音楽)を取得。現在、アンサンブル九条メンバー、東京芸術大学非常勤講師、京都市立芸術大学非常勤講師。

Nanana-Nana Ensemble vol.3

2023年6月6日【火】19:00開演
日本料理教団 天満教会
主催：ES・ストリングス 協力：日本音楽財団(日本財団助成事業)



Program

D.ポッパー 2つのチェロのための組曲 長調 作品16より

- David Popper (1843-1913): Suite for 2 Cellos in G major Op.16 (1876)
- I. Andante grazioso (アンダンテ・グラツィオーゾ)
- II. Gavotte: Allegro vivace ma non troppo (ガヴォット:アレグロ・ヴィヴァーチェ・マ・ノン・トロッポ)
- III. Marcia. Finale: Allegro ma non troppo (マーチ フィナーレ:アレグロ・マ・ノン・トロッポ)

A. グラズノフ 弦楽五重奏曲 長調 作品39

- Aleksandr Glazunov (1865-1936): String Quintet in A major Op.39 (1886)
- I. Allegro (アレグロ)
- II. Scherzo: Allegro moderato (メヌエット:アレグレット)
- III. Andante sostenuto (アンダンテ)
- IV. Finale: Allegro moderato (アレグロ)

— Pause —

G. エネスク 弦楽八重奏曲 長調 作品7

- George Enescu (1881-1955): String Octet in C major Op.7 (1900)
- I. Tres moderé - (とても穏やかに)
- II. Tres fogueux - (とても激しく)
- III. Lentement - (ゆったりと)
- IV. Mouvement de valse bien rythmée (リズムミカルなワルツのテンポで)

Program Note

ダーヴィド・ポッパー(1843-1913)：2つのチェロのための組曲 長調 作品16より (1876)
ポッパーは、ブラハス生まれのチェロのヴィルトゥオーゾであり、チェリストにとって欠かすことのできない数多くのレパートリーを残した作曲家です。協奏曲から小品に至るまで多岐に渡る作品は、ハンガリー民謡を巧みに取り入れたものや、ワーグナー後期ロマン派の影響が見られる濃密な和声感が特徴的です。本日3つの楽章を抜粋して演奏する《2つのチェロのための組曲》も、名手であったポッパーらしい2本チェロの可能性を最大限に引き出した作品。第1曲はサロン風の美しいメロディが印象的。続く第2曲は憂いを帯びたスラヴ風の雰囲気感を漂わせるガヴォット。フィナーレ楽章は技巧的かつ歌心も満載のマーチ。

アレクサンドル・グラズノフ(1865-1936)：弦楽五重奏曲 長調 作品39 (1886)
グラズノフは、ロシア国民楽派と西欧アカデミズムを融合させた作風で愛されるロシアの作曲家。14歳で師事したリムスキー・コルサコフからは「日毎というより、1時間毎に進歩している」と言われるほど熱心に学び、16歳で発表した《交響曲第1番》が大評判となるなど、感性も才能も豊かな少年だったグラズノフ。本日演奏する弦楽五重奏曲も21歳の作ですが、前後してボロディンの未完オペラ《イーゴリ公》の補筆作業に関わっていたことが影響しているのか、ロシア5人組を受け継ぐ節回しとブラームスを思わせる重厚な和声感、また印象的な素材を巧みにまとめる構成はすでに貫禄が感じられます。
郷愁を誘うヴィオラのメロディで幕開けする第1楽章はどこまでも身を委ねたい心地よさと、推進力も共存する音楽。第2楽章はビチャート奏法が印象的な可愛らしいスケルツォ。続く緩徐楽章では叙情的ながら情熱的に各声部が絡みます。フィナーレ楽章ではロシアの民族舞踊がテーマとなり、自国の民族色とクラシックな書法の融合に抜群のバランス感覚が光ります。ただグラズノフの生きた時代は、いわゆる無調一秩序の崩壊という荒波へ向かって突き進む途上でもありました。サンクトペテルブルク音楽院で教育者としても大きな役割を担ったグラズノフはその流れに強く反発する音楽家でしたが、若き日の本作からも彼が愛し守ろうとした響きがとどめなく溢れています。

ジョルジェ・エネスク(1881-1955)：弦楽八重奏曲 長調 作品7 (1900)
ルーマニアの天才ヴァイオリニストであると同時に、ルーマニアの民謡や民俗音楽に着想を得た作品で知られるエネスク。7歳からウィーンで学び、わずか9歳で作曲を始めていたという早熟の天才ですが、本日演奏する弦楽八重奏もやはり若き17~19歳頃に書かれた作品。完成当初は数回のリハーサル後に初演が見送られたという逸話も残るほど、演奏の難易度も抜群に高い作品ですが、8つの楽器から繰り出される色彩豊かで斬新な響きが独特の魅力をはなつ名曲です。
全体は4つの楽章で構成されていますが、単一楽章のように切れ目なく演奏されます。冒頭から7つの楽器がユニゾンで奏する主題は情感と迫りに満ちており、その主題を保続的に支える「ド」の音は地に足ついた構想が通底することを示す一方で、半音進行満載で鬼気迫るスケルツォ(第2楽章)、悪魔のワルツを思わせるフィナーレ楽章が生み出す緊張感、混沌とした時代の空気をあ映し出します。第3楽章は母国ルーマニアへの深い愛や郷愁を感じさせると同時に、儂や葛藤も含む奥行き深い音楽。全曲にわたって古典的な対位法の技法が多用されていますが、対話する楽器の組み合わせから生まれる絶妙な響き、終結部に至って様々な伏線が回収されていく構成も圧巻。エネスクが描いた壮大なドラマをお愉しみ頂ければ幸いです。